

単元名 「Welcome to Japan.」『日本の文化』(We Can2 Unit2)
 授業者 T1: 本山 進 教諭 T2: 山下 由紀子 教諭

提案授業 (第6学年)

※第1回教材研究会(5/16)を受けて、下線部分を変更しています。

- ◆新学習指導要領 領域別目標(4) 話すこと「発表」ウ
身近で簡単な事柄について、伝えようとする内容を整理した上で、自分の考えや気持ちなどを、簡単な単語や基本的な表現を用いて話すことができるようにする。
- ◆【CAN-DOリスト形式の学習到達目標 第6学年 話すこと「発表」】
学校生活や地域に関することについて、伝えようとする内容を整理した上で、自分の考えや気持ちなどを、簡単な単語や基本的な表現を用いて話すことができる。
- ◆【単元ゴールとしての言語活動】
 高知に観光で訪れる外国人に、日本の文化のよさについて伝える。

- 【単元目標】
- 日本の行事や食べ物、遊びなどについて、聞いたり言ったりすることができる。(知識及び技能)
 - 日本の行事や食べ物、遊び、自分が好きな日本の文化について伝え合ったり、例を参考に語順を意識しながら、書いたりする。(思考力、判断力、表現力等)
 - 他者に配慮しながら、日本の文化について伝えようとする。(学びに向かう力、人間性等)

【本時の活動(7/8時)】

- ◆ねらい
 他者に配慮しながら、日本の文化について伝えようとする。
- ◆評価規準
 他者に配慮しながら、日本の文化について伝えようとしている。(主)

時	児童の活動
ウォームアップ	1 あいさつ Omiya Talking Time
	2 ラーゴ市の高校生と、観光客との違いについて気付いたことを話す。
	3 Let's make today's goal. 相手のことを考えて、日本の文化を伝えよう。
進める	4 【Activity1】 それぞれの立場(発表者と観光客)になり、日本の文化を紹介する。
	5 中間交流 観光客に伝える中で、困ったことや伝えられなかったことについて交流する。
	6 【Activity2】 中間交流で確認したことを基に「日本の文化」を伝える。
	7 【Activity3】 参観者に「日本の文化」を伝える。
振り返り	8 本時を振り返る。 振り返りシートに記入する。



教材研究会を受けて

- ・領域別目標を「話すこと(やりとり)」から「話すこと(発表)」に変更し、CAN-DOリストと評価規準を見直した。一方向的な発表ではなく、やりとりを大切にしたい発表を行いたい。
- …重要なことは、コミュニケーションを行う際、英語で伝え合うだけでなく、自分の考えと、コミュニケーションする相手の考えを比較したり、新たな考えを知識として取り入れながら、自分の考えを再構築することである。(小学校学習指導要領解説 外国語活動・外国語編 P99)



協議内容

- 【視点①】子供の言葉を拾い、ぐだき、つなげているか
 ○これまでの積み重ねと授業者の「それはどういうこと？」等の声がかけて、児童が既習の英語を使って表現できていた。
 ●言葉をぐだいて終わりではなく、使って伝わったかが大切である。
 ●考えても出てこない言葉はT2やALTがインプットするとよい。
- 【視点②】相手に配慮したより良い表現の工夫を考えさせているか
 ○相手に配慮した挨拶(Excuse me, Have a nice day等)や、質問を想定した発表ができていた。
 ●文化を伝える場面でも、相手への配慮を考えさせてはどうか。
 ●児童に観光客役は難しい。参観者→中間交流→参観者の流れにすれば、より深まったのではないか。



- 「新教育課程を活かす『能力ベースの授業づくり』より
 齊藤一弥・高知県教育委員会[編著]
- ・子供が「この目的、場面、状況で自分の伝えたいことを伝えるにはどう表現すればよいのか」という問いをもち続け、思考しながら言語活動を行うことが主体的な資質・能力の育成につながる。【授業づくりの視点18-3】
 - ・学習到達目標と内容の両面で小中に系統性をもたせて指導することで、言語活動の質の向上を図る。【授業づくりの視点5】

講師：鳴門教育大学 中妻佳代 准教授より

- ・総合的な学習の時間や学校行事と関連させ、本物と出会わせる単元にしたことで、子供が意欲をもって自分が本当に伝えたいことを伝える活動になっている。
- ・大宮小では、低学年から、子供が言葉をぐだき、言えなかったことをどう表現するか考えさせている。それに加えて、単元や1年間を通して学校全体として Small Talk を積み重ねてきた成果が、本時の子供の姿に現れている。
- ・ラーゴ市の高校生と観光客との違いをもう少し明確にすれば、子供たちの表現にもっと工夫が見られたのではないか。
- ・良い聞き手が良い話し手を育てる。「観光客役の先生はどんなことを言ったか」を受け止め、自分の発表を変えていくことは大変であるが、それを乗り越えることで質が高まり、深まっていく。
- ・いただいた言葉や表現が間違っていたり、相手に失礼にあたる場合は、正していく。TTの場合はALTや中学校教員等の外部人材を活用し、担任一人の場合は次時までに調べて子供に伝えようとい。
- ・めあてに沿った振り返りを行い、学びを自覚させ、共有していくとよい。

- めざす Small Talk (対話) のために
- ・子供の既習単語や表現を把握する。
 - ・子供の興味・関心を把握し、学習単元と関わる題材を選択する。
 - ・単元目標・ゴールとなる言語活動の具体を意識する。
 - ・使いながら使えるようになるという意識をもつ。
 - ・子供がどう言ったらよいか分からないことをかみ砕く。
 - ・子供とのやりとり、子供同士でやりとりをして進める授業形態を、どの教科でも実践する。 (※抜粋)

参加者より

- ・言葉をぐだいていける子供を育てるためには、低学年からの積み上げが大切であり、だからこそ学校が一丸となって取り組んでいく必要があると思いました。子供の表現を全て受け入れるのではなく、本当にじっくりくる表現を考えさせることが大切だと思いました。
- ・コミュニケーションの楽しさを実感させることが大切という言葉が印象的でした。考え、新しく知った表現を使う喜びや、相手に伝わった喜びを通し、他者と関わることのよさを積み上げることが言語学習の根底にないといけなことを痛感しました。そのために、教室から出て本物と出会う機会を設定することは意義があると思います。
- ・振り返りの時間を設け、「今日分かったこと」や「疑問に思ったこと」を共有することが大切であると思いました。また、「中間交流で考えたことが使えたか」の振り返りにも取り組んでいこうと思います。
- ・子供に単元及び各時間でしっかりと問いをもたせ、問いに対する振り返りもしっかりと行っていきたいです。

教材研究会を受けて実践していること

- ・中間交流で言葉をぐだき、一緒に表現をつくり上げている。子供の語彙の多さに、毎回驚かされる。既習表現を使おうとする姿が見られるようになった。
- ・学習指導要領、CAN-DOに戻って、全学年の付けたい力を確認した。
- ・子供の実態に応じたプランの作成。
- ・子供の興味・関心を基にした単元構成、アレンジ。
- ・単元ゴールを第1時でしっかり示している。など